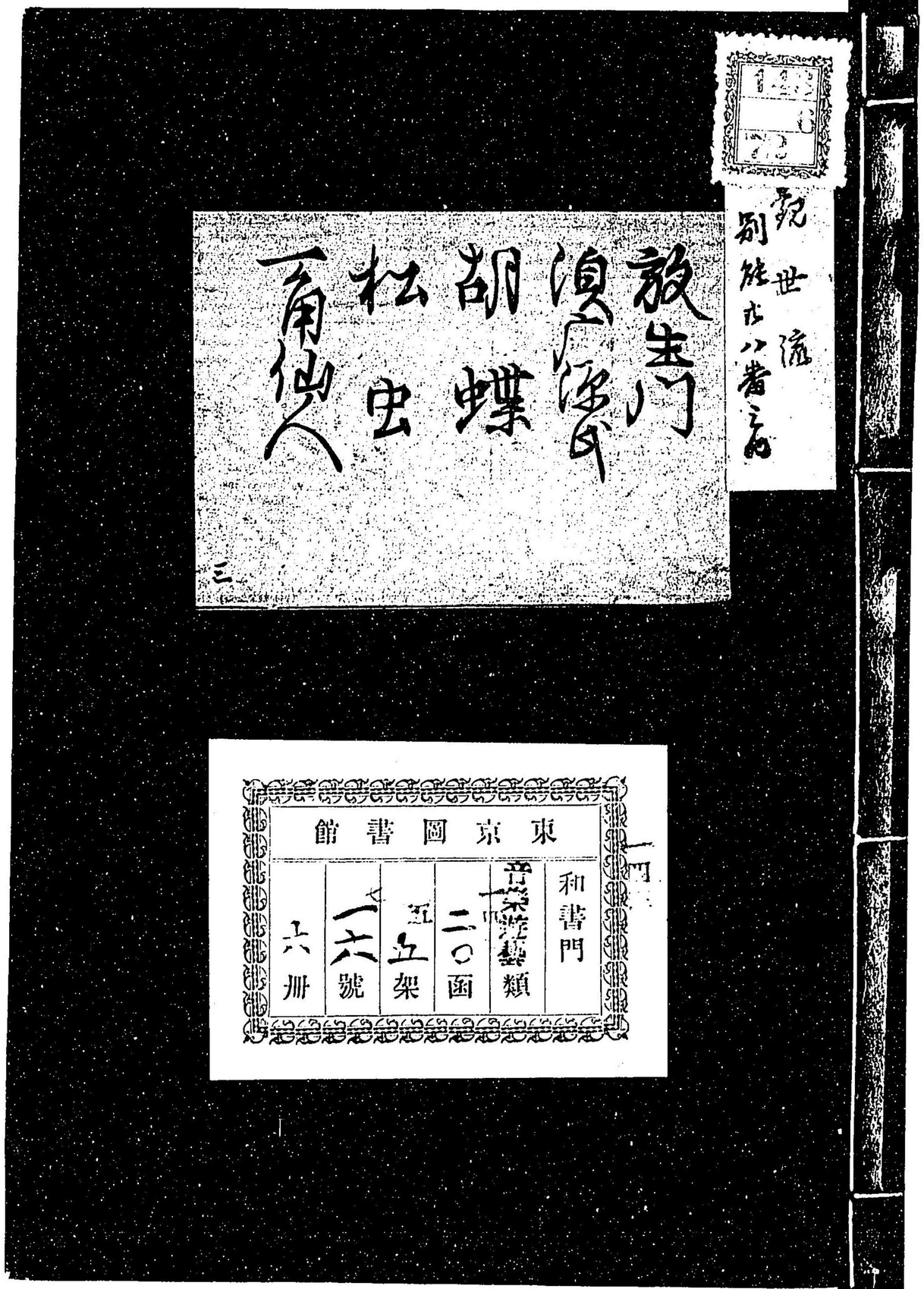

放生門
漁父
胡蝶
松虫
一角仙人
三
東京圖書館
和書門
二〇函
五架
一六號
六冊

敬注

御歌をあつらへ山君乃ぶく四方紙
[illegible]
[illegible]
行くさの行末ゝ也拾ひこゝ乃
京都よりゆ陽乃寺社[illegible]
四ろくゆゞとゝ日乃南祭乃由歌同
ゞ幡よゝ玉ゆ申さやとゝ[illegible]作日暮り

敬注

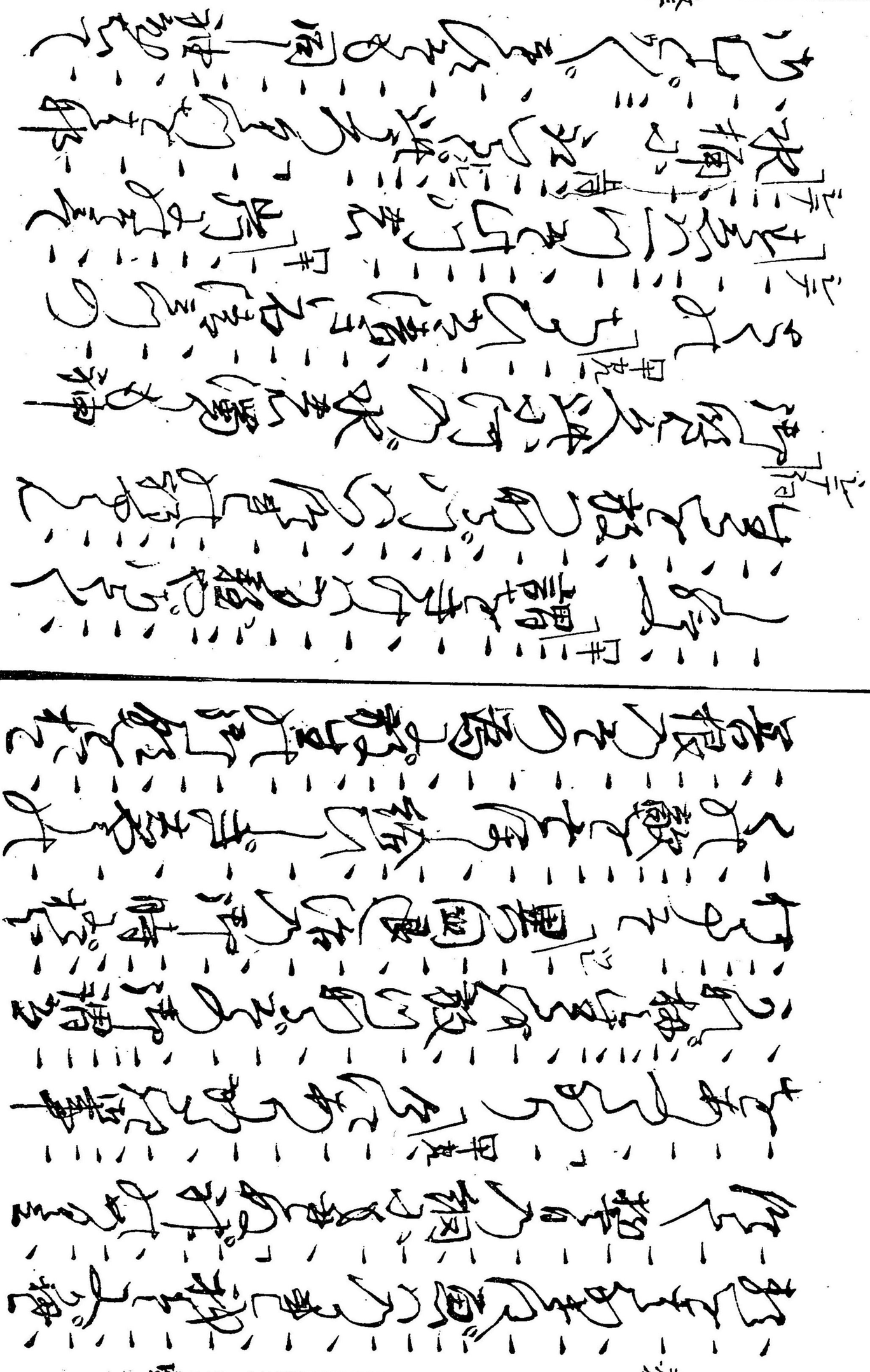
なほ都の山の深きぞ哀なる
それ丹波山伏見の里も遠う見ぬ島
羽の細道うちこゆる滝の白糸掛るまま
くもりなく月や神まつる心八幡宮
清さに急げけり　急は注
よ豊はたや八幡の里を急ぐ心静
社ふやしけりまるみ　うゑ
ひぐけ　ぬ波よ
あくや秋岩水　山れ
ぶ
人を教へ　を賞し恵を
ぶ　ぬ
ゆ　ふ　ら　ま　ま　ま　積

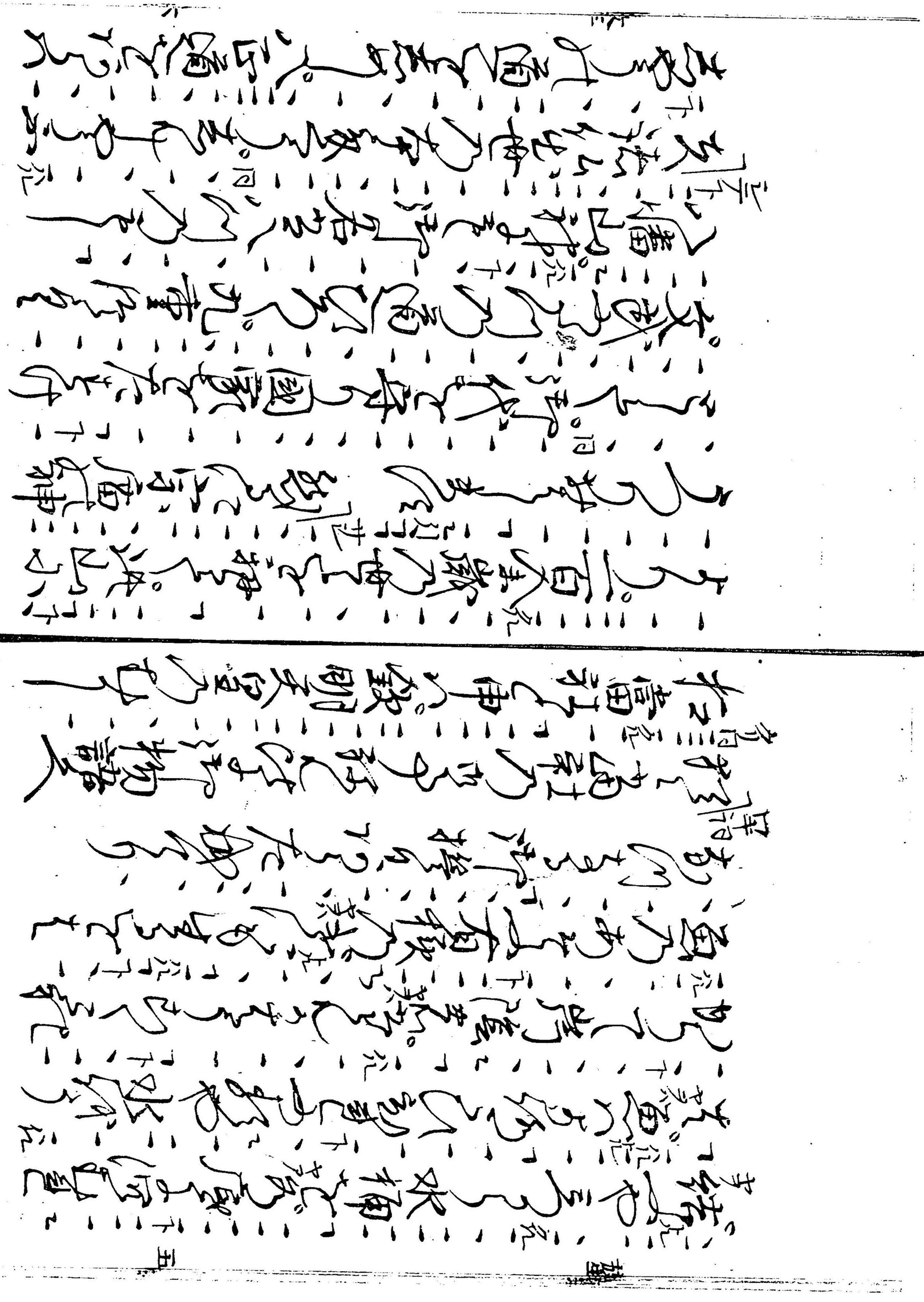
此鋒慶におゐて吾西のうきひき
のとしが和光の御影の道直なる御掟を
此海をうろうの道すくしきれ
初しくげにのある世に道ま筆編
よ當社の御神事也 さて年
も早振神のまゝにこく消去く
此御代まで弓月の此八幡山ぐく

宮路のあとい久堅の雲のうちらんせい
うらほうく枝をあらさね松の風をのき
君をまもる乃こゝろやましく戴きまゐる社
殊く
しゆて見成雅よろ云人
さま事めん こゝあらの深作ら
行めりそ けふ八幡の御神
事とく清浄のまことの姿

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]





人佛不二乃御心ゝ正直ゝ
おやゝ給ふ　名ウ人の國ゝ我は
他人ゝ拵ゝ他人と拵ゝ御
ゝ有難やゝ神ゝ
ゝ
ゝ給ん御ゝ
ゝ行教ゝ乃御法
乃油ゝ陰ゝ乃ゝ御の恵ゝ南

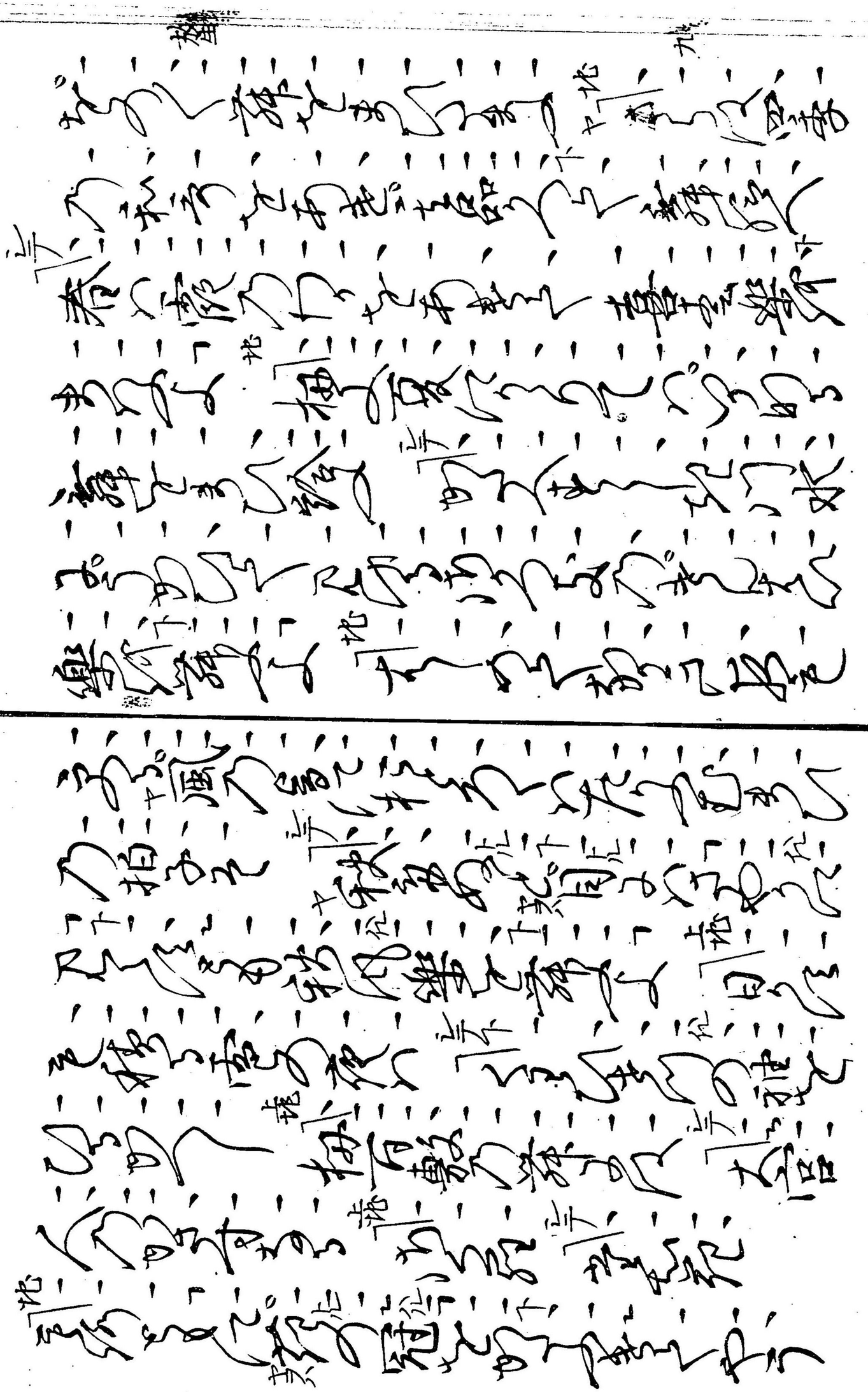
ゝ山ゝ月ゝ
ゝ給ゝ宗廟ゝ
ゝ代ゝ
ゝ國ゝ民ゝ海ゝ
鄙乃ゝ海の波ゝ
上ニテ下ニ　打益法立ゝ御拵ゝ世ゝ楽乃
神德ゝ
ゝ男山ゝ松

よそに求むる方もなき、峰の嵐のみかは
宮柏の郷も遠く峰は此山のくらそれ
ほの里神楽げにきの心すさめし夜声
もいとゞ神さびて月すみわたる石清
水ながれのたえぬ誓ひされ宮あさからぬ
誓目出度恵みもよく
かほどくもりて神の告ぞや

古経や　代をはつて古へも二百
余歳の春秋を送り迎へて神さびく
を請ずれかゝる武氏の栄へあれ
なりとも楽しみあつき男山の松
まつりて山よりひかりのきまりく
擁護を代てよりうつらぬ男山あつく
みねより月影のさやうにてさまる

ちぐ（ウ）ぜんとたこ夜神樂の声をの
ひるぶ乳ぶ（なこ左）くに有難や百王
守護の日さそりぶりてたこ天下
ぐ萬代の秋をもこ和えのうあを等分
秋ぐ神とたをこつ人の信武氏と申
発へあり（上北）未社をそのく出現く
ぎ弥えたる放せれ神の御事分ちや

むきぶ（元）ぶりさしまたをのこね（地）
山下につるあるこ神年れ去や人（元）小忌
乃良の神をつるね（地）お早振りあま
をそあ（元）ひさあ月乃つる乃男山（地）
りやけさるきぶ所う弘（上ロ三ヰ地）柳を神代
を和奇をりきぐ。茅をまひきるめ
てたさよ（上元）中くをこれ御夜をめ



あくらも立まうりぽていたくをま
ぬらうや行のゑハ行とめうおへ言葉
乃花も肘ともきいば其ぬう抑をさらむ
かく鬼も神も動きを和哥乃道
ううめてうときれく

須广源氏

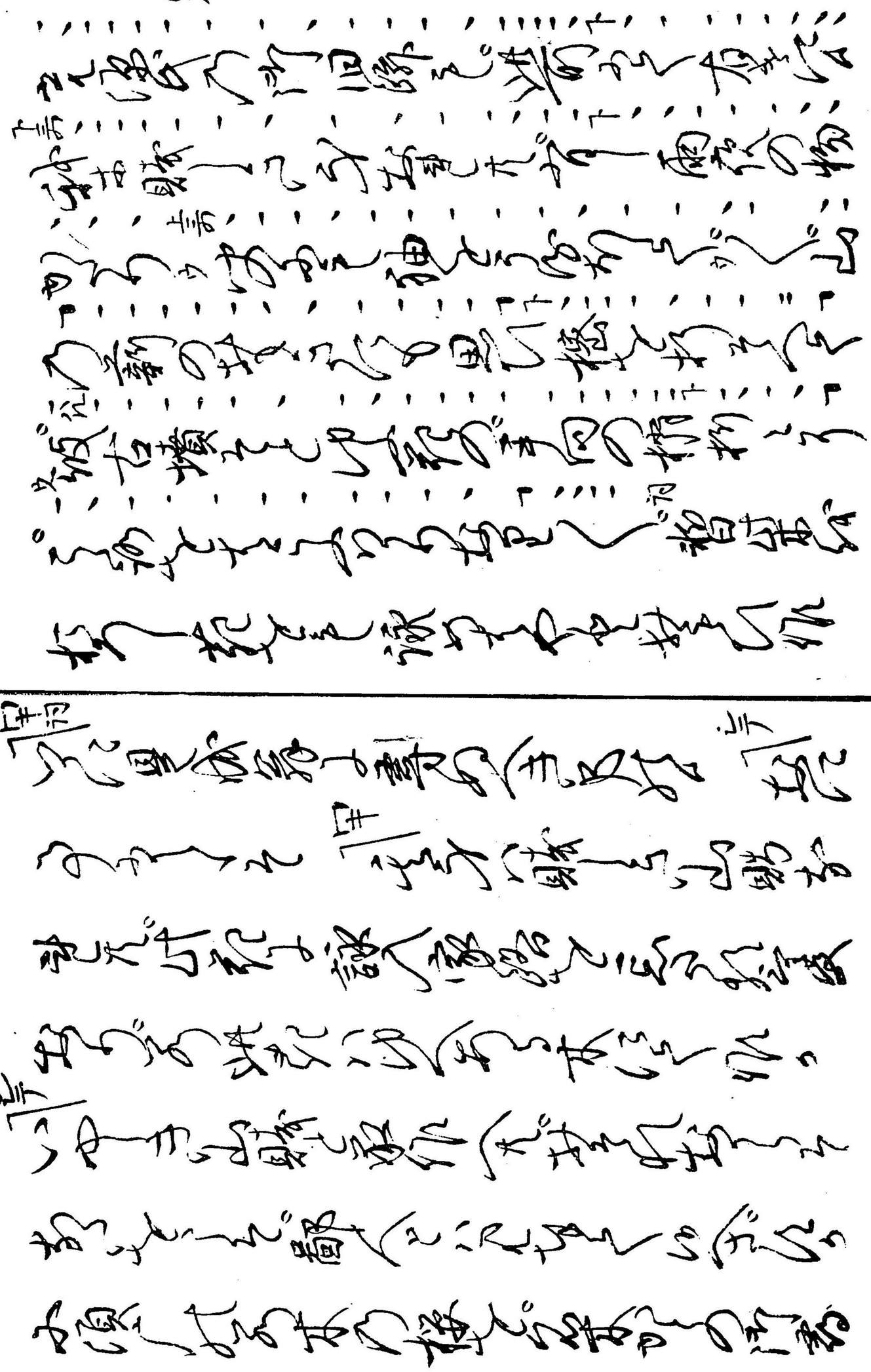
第 八重の垣路乃振のをく九重行
ハこゝ あくらし 打是ハ日向国宮崎乃きや
くゝらし藤原の興則とハ我乃也梅を
我邸乃任拾あく依く未伊勢大神
宮へしまういは額よ此度思ひ立伊勢参宮
家とおもく行 振衣おぐ日立あね

朝霞ぐくにはしまの空をしまくく日影に
のどかに行舟路ぞ長くしてもはなくと
波のうへ雲間に見えて須磨の浦に
もはまきやもしく新造の浦に着きにけり

国須磨の浦に付きしかば此所はいかなる
俊成の大将まを済し柱詣みてぞまゐる
郎及されば若木の桜を一見せばやと

枝なれば　浮世をわたるにこそわたれ身の程
こりすまぬ塩木の都　松もちてまゐる
煙とこめる里や若葉の陰ならん
生きる須磨の浦には日を重ねて釣をも垂れや
ぬ間は塩木をとりて浮世を渡る春にこそ
作りし文此須磨の山陰に一木の桜の
がにあふ木はめはつかしへ

二



かごにしをりつゝ社へさよ　宮と
須磨の山桜名におはなる花ぞとて
ずぞく宿にかへらん　かきも数の御
心の　日もすでや暮れ波のうら風
さる程里にもたれ泊らまくて　野をなか
山よ　我が行かい　関よりも花ぞり
さみるら須磨の浦風ぐさらう

の山里は業として桃まて名をとゞめし
さのみなてんで心ある御垣守らなく人ない
やがてゐる日をよく　つれて春ごとこの
前栽の庭の御旧跡ぞよく御なのに年
うつたる者ならんと桐壺の御事抱きへ
忘るらるしよりへをかたくる彼やれ
まことにさびしきの夜までき世の業ん

おもよ。桐壺の御ゆかりの煙をも見しの淵
をたづねいとゝ法の道にぞ入る
日の宮の露をも宿す桐の葉の
ちりぬるさきぞ悲しき

高麗国の相人のつぎにもあらず
ぞまた保氏とゝのふ帰京末巻より中

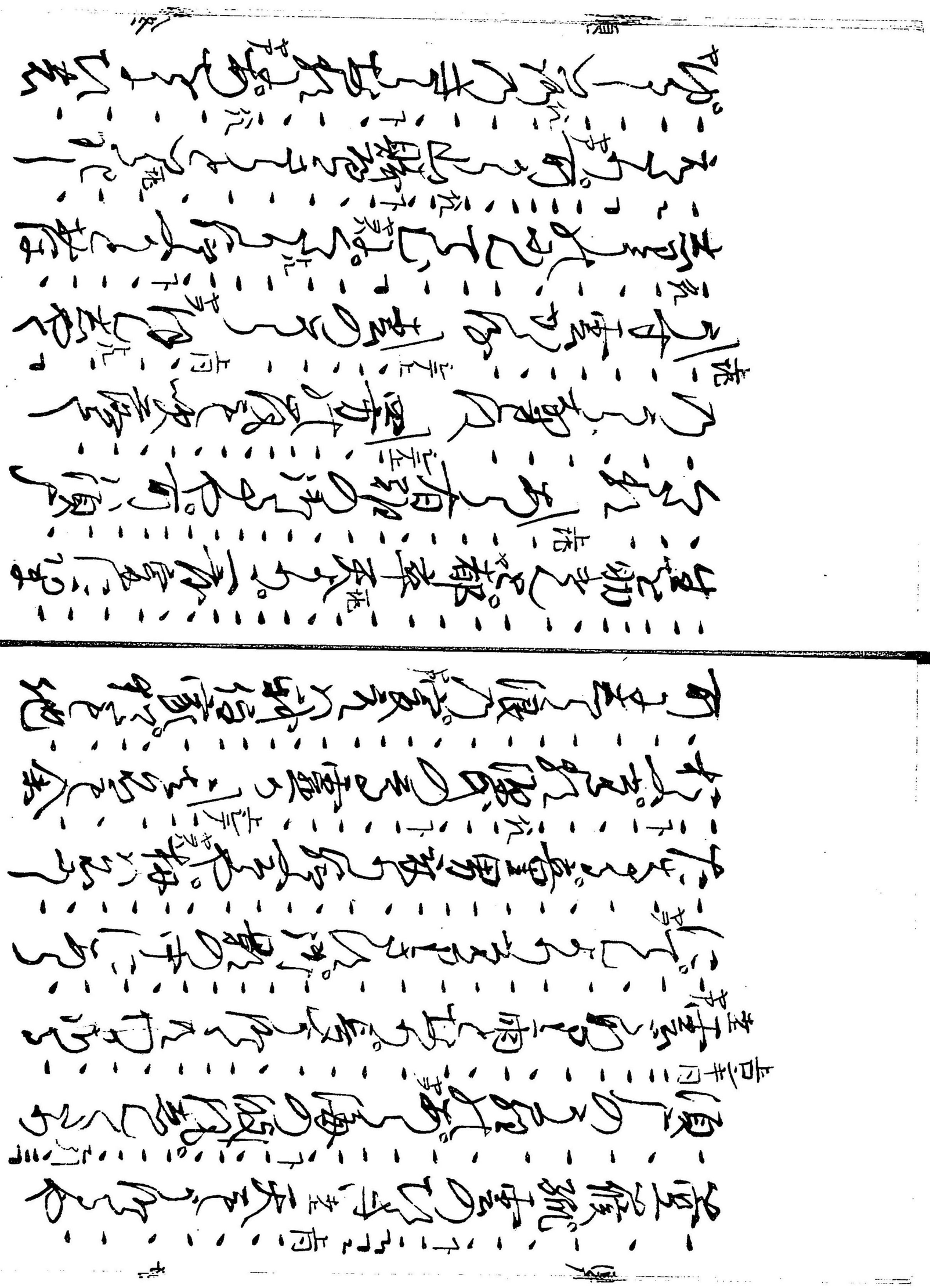
[illegible]
[illegible]の哭の[illegible]に位を叙せられ
[illegible]喜[illegible]の[illegible]行[illegible]て入月
[illegible]ほどを[illegible]年[illegible]五[illegible]
[illegible]帰京の[illegible]海[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

おれ行き有りて、都より召されし數
乃かの宮を給ひ、上にて、やがて殿ばらを
ゆるし給ふ。四人召しめし者ども、大臣
白藤の中納言、藤原の中将、天皇かくだり
給ひ、吉義、梅ヶ枝の君とハよるう
氏の出乃ぐ、ぐ、ぐ、の弱やし
乗くを、上にて、いつくにぞ、左右後
乃宮殿ハ皆、そなつ多、高月乃
を分給へ、きやう奇おて行給ひ
ぬ。ぬ、ぬ、や奇おて行給ひ
月景の、上にて、川住家、北、普須
ハ、ハ、ハ、の、上にて、夫より後ハ月宮
ら、上にて、あまつ、此海より歌向有り
が、上にて、より、上にて、物語漢乃

春のうぐいすや雪かうすてそうせ
き松。雲隠しくれ暗ら　梅沢氏

其大将殿よ人間とき山ぶ松よ宮殿
かくれ行くうぐいすや今青い宮殿ぬく
ぶを寺ぶと梅ぶ須ぶ乃うぐ暗
山の月よ梅の花ぶ　心とき西ぶ儀式
波よたくつくる音楽のあゆる聲そうう

ぶ乃ぶく　荒面白ぶ海原やかぶ武蔵
陸よ春時ぶ今宮殿氏とまきぶ人ぶそう
ぶう宮ぶ天上ぶ住梅ぶ梅ぶれぶ月よ琴して
高宮よとうぶ乃ぶ須ぶ乃海ぶまぶ者
海波の梅音楽よぶぶわく月ぶ武ぶ
乃梅ぶべとぶぶ。波の花ぶ白衣乃油
玉ぶ笛の音拝澄ぶ　笛琴



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第[illegible]　胡蝶

[illegible]

[illegible]

奥よ山居の僧よ[illegible]

[illegible]

[illegible]

旧跡[illegible]一見せんやと思ひ[illegible]

吉野の、ごう孫たち雪まろばしてゆく
花をそこなはるもうるさし乃吹らる家
乃山もへてゆうしむるもいや三笠山
あきこそ、あるもおてまつれその色乃
きこうきの道をくるもれ来郭
よ見よきりくく息ゆ方。猛なる
郭よ見てゆれ而をへ人工書ひてへへ

一条大宮とゆ院宮ゆ心静よ一見世
ちやと思ひ乃ゆ景成可を見ん見
ゆ有きゆ古宮乃ゆ軒乃ひ乃
を岩山て、ひ乃ゆ志乃ぬ乃ゆ
ゆ草ゆ泳よう一寿まり
ゆ車よ飛ゆ岩ゆとろゆ乃ゆ
乃ひまろうゆれ見ゆ乃を

とよ色とある梅花乃今をさかり
さへてはゐ立寄あるめをと思ひ
ちりつくす僧ハいつくと思ひて花梅を
保めるひと我ら不思議なれ人あれ
こへぬやつまよりゐ女性一人あり
我よ行とうきをやゝ佐宮をは
いつかゝ戸ゐ我ら梅ハちりぬるを

事ゆゑくゆゑまひくりやゝをゝ佐宮は
いつくより詠ん人ゆ人あるそ
昔ハ和州三吉野乃奥ゑ山居乃去
ゆくゆゑ始てゆゑ詠ん人
てそへんあまとやねゆゑ宮ゑ
昔よりゆゑゑ古宮よて大内を経
ちくゆゑうちある社梅を雲乃人

人きこえ詩奇管絃の遊をも
よほどめ強をぬ花の色ぬ
物とめらく世せよ あら面白
可うらぶらつる花の色を
今うるかの春の暮へ
名を人そぬ名をあるる梅
花可の人をまし海棠ぬ

久社きうまぬ きれ 名可ふすあ
心をぬ分ぬ山の乃年をへて
もし風をうらら色うえらく是ぬ部の
花さうり 心をと決て 色ぬうき
梅う香ぬ むうをとぬ雲の月ぬく
ぬうへぬうきる我袖ぬつるぬひ
や年をぬる古京の移望苦山て

昔ひしき秋をへだてなるとはの石
の浦よりもむかしあるかこゝろをも
よ宮ばらやく
屏風
ひく洲宮の褶ぬ
春のあらんへ
けのそつゝむを中く
ゆ人うまくや思石きんさうあらう
ゆへ見れへ人百よあらぬ我苔あ乃
花よ忘ゝあ搦よ遊ゝ
ぬき望れあるゝ
梅花ゝえんなゝ
とたうゝ
梅むゝ
そゝ
ものゝ

あり情は春夏秋をへて草木の
花にゐつゝになれこてふとすぎても
まのつゞ契りを結ばぬ身にてあま
ども梅花に縁なき事を嘆き
とうへては僧に結縁をとうりなり
妙へなる法の力結縁の花に交へて
おもども利益あり傳へきく唐土の

荘子があらはし夢の小蝶の姿う
つゝあらはるゝ世の中ぞあだなる
まことなる世をいひあらはさて
名をうけたまひし光源氏の古へにか
蝶の舞人色ゝをつくしぬるはうさる
金銀のかめにさす山吹の花かざし
のきぬをとうきうへに花その小蝶を

さくやこの花に秋まで出でたる
ひとらんとあるめこと首ゆるしと多言
の用をしり入宮のうちべめまし
御方のもとにとまるべきなら殿の人わろ姿
美しうあるべしへとど詠のやよ
きえて美のもとくかまり美のと
ちよめよきり 上言平 あるて及の美美

上言ヲテ

有経やけが典のうきはるる
び情非情を漏らもあく伝果よいる
花の色ぬきに北とをしつ梅花
よ人の山をあひまつるぶ蝶哀

せいさんあらつきてり 有明乃月も
てりそふむ乃うへさとうれしきかな
蝶乃姿かならうきおもふよろこべる人の
人とふいうくもさかうるとくつの花
乃色蘭ぬ梅よおもうきて 小蝶よ
をざそてつきおましんあそて 八重
山吹をへさくぬ梅乃花よとひらふ小

蝶乃舞乃袖をかへすきせきるる
四季折々の花ざかり 梢に心をあ
うけくもがうさき宮乃前うきあ
れうら野も程ちかく野花黄鳥
春風をまやうし花前よて舞うたへ
くるる雲とめらるる舞の袖らん
くも雲白や 芸長嫌の花それ

きらくに、おとをおひさまつる菓の
花物がを枝をめりめりめりめりする
やか車の法よひうまく仏果よりする
お蝶をうめかの葉の沙を弱
もやまの月のぶ行雲よりうちうち
ぶきを行をよりうちうちうちうて歌まま
きれてで際よりきり

松出

いき羽

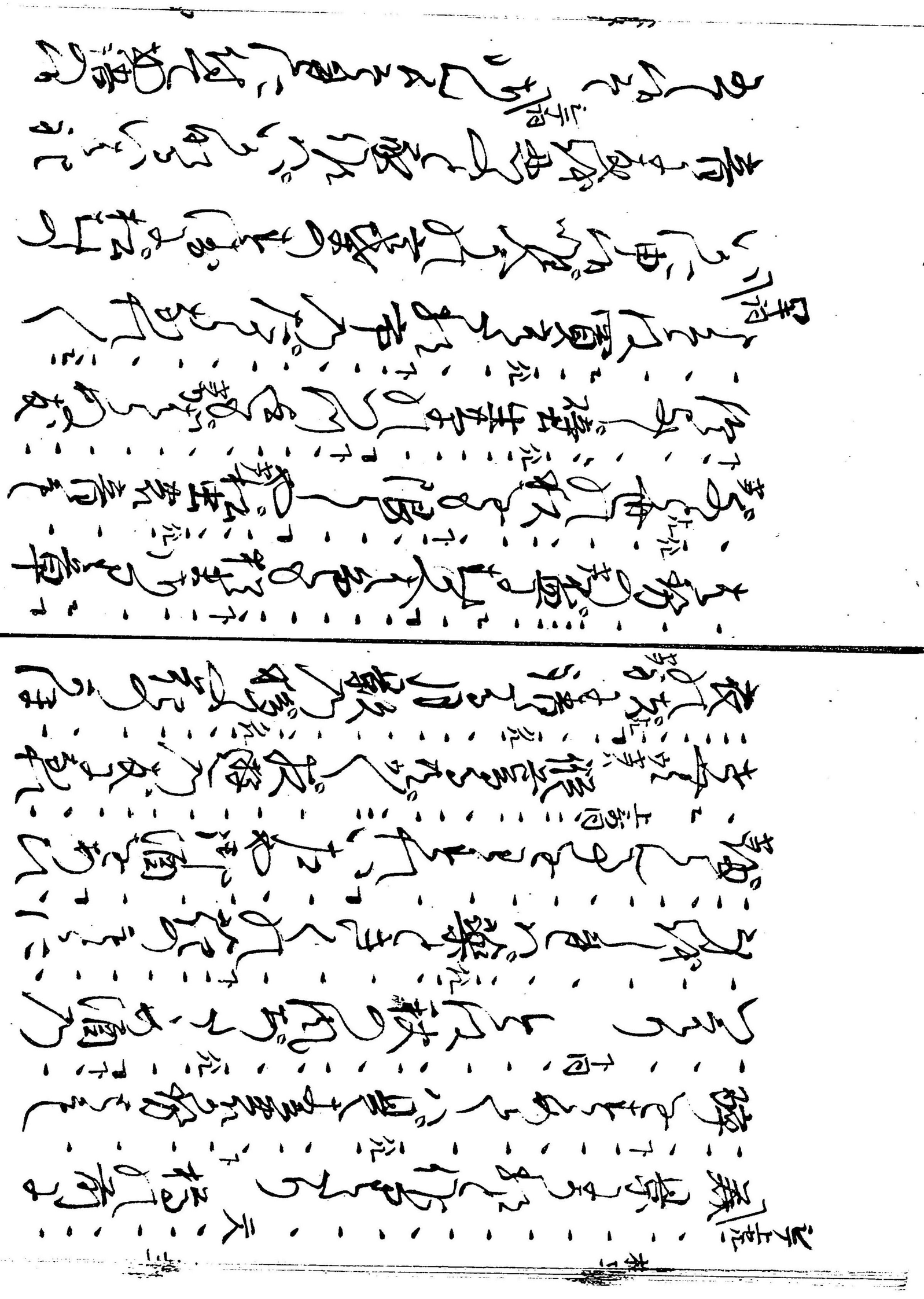
見ハ津乃國河部野乃あるうに住居
はる者ふく仏ぶ我山あ乃野の市う
出ふく酒を賣乃家よび行くをふ
ふる比男れ松多まり酒をの人ぬ
りの人酒喜をよりてかえりぶと
やらん不審よ乃同べう日も暮りてん

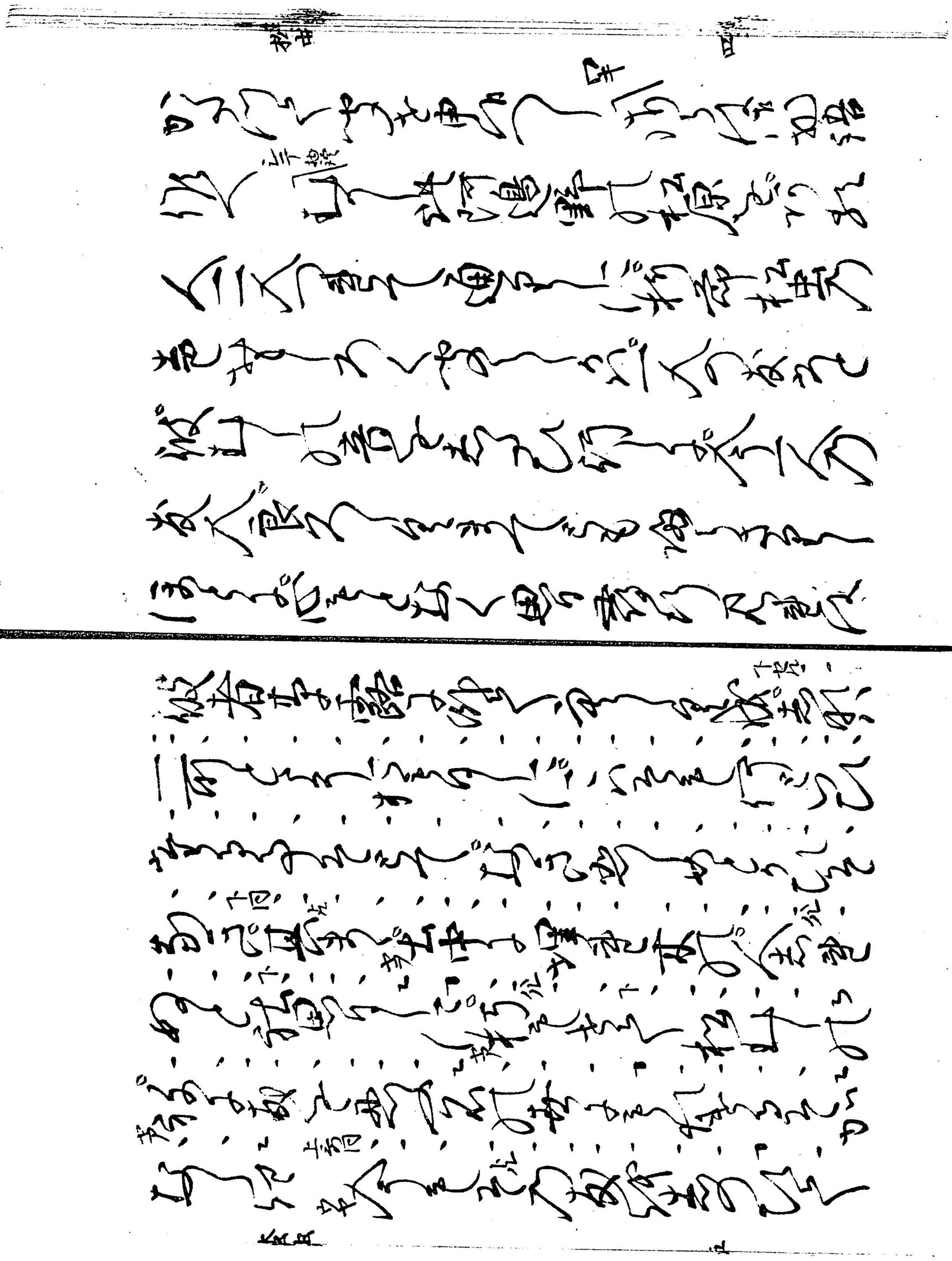
くいうちものそと名は書はやと思
ふとは秋をまつ松虫　元ニ下　音にぞ
なきをあつらへ　ヒテサセ　秋の風ふけばまつ
長月は有明方に朝うち分て袖の色
作りを市人賣ばゆ出て道の色
ぬれ露の露しぼりぞつまりける色
色は蓑代宿を出るぞ〻の市路に出る

ありり　遠里　上三　狩をさはやすを
の山ぞ〻ら作り　ウヤ　堀川もゆる岩
野の秋草　ウ　松を聊て　元ニ下　ぬれ
良ぜ　元ニ　て色　元ニ　なれそ　元ニ　山市うつれ
下ニ　元ニ　元ニ
りとくよ　元ニ　ぬれ　ゆくぞ〻野ぞ
下ニ　元ニ　ニ下　元ニ
原を面白や　ヒキセル　傳へや白樂天う
酒切替を作り　和を詩酒の友に

ちらすらく市屋形よ格をとりつらを
あらんてらとらまを例あたりいたに
人を酒石をとる人をまとりて宿を蒔うら市よ
あらひらも四方乃かからよ人はをとを
潰りとは人をこうゆつたいたを
面とよ醜酒を酒らくてまり絵へ
引り紙人乃業れらやきよいれよ

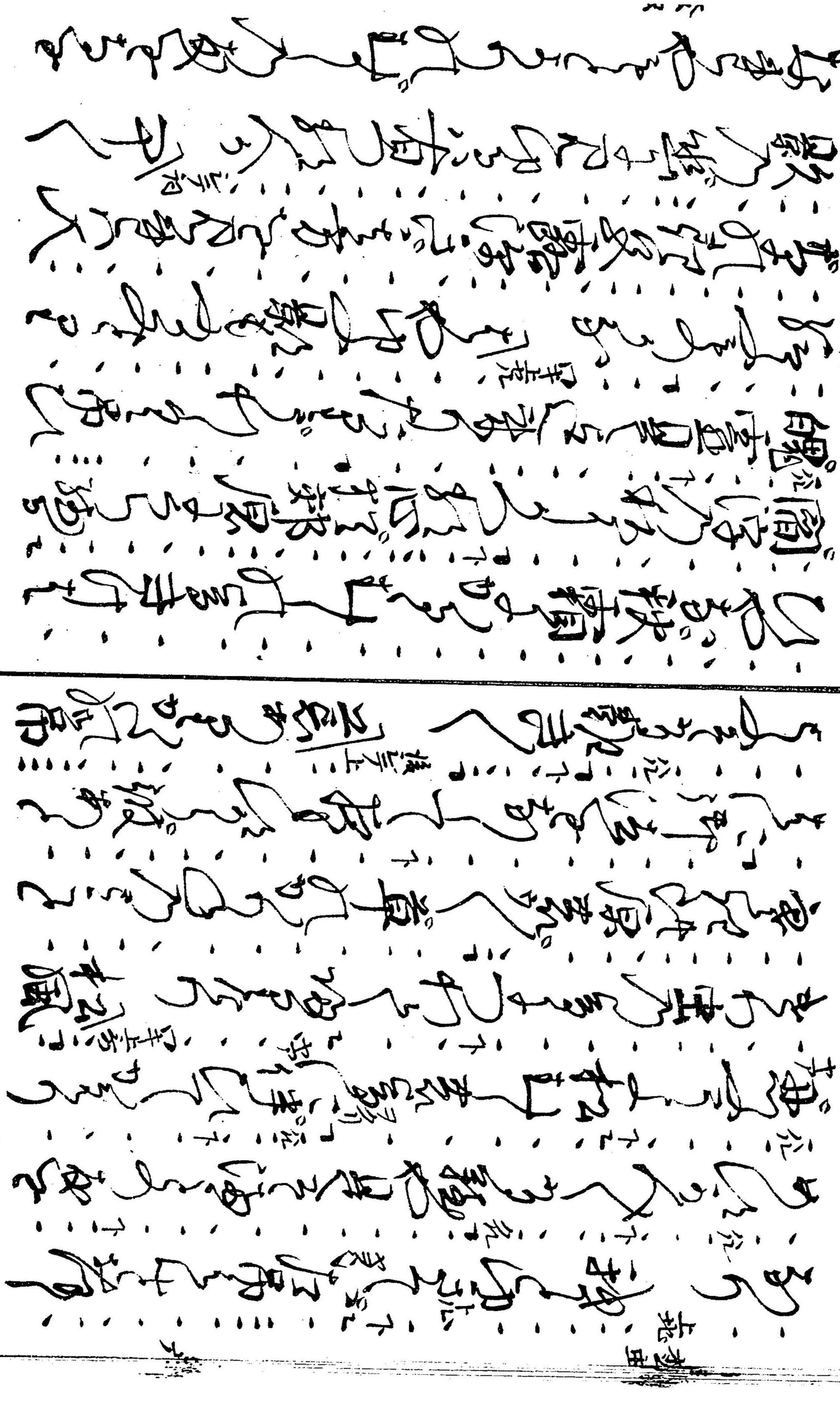
酒をとる人遊楽抜乃和奇を海
人を心を財めらを人をやをまり絵へ
そをよ　仕神を早れりをよ
中くつ中を言をれまを月をを見て
給をよ　れ物をなりをにくう
び酒をを月を捨へをを詠をを記
乃をとよ　帰り山事をれをまり

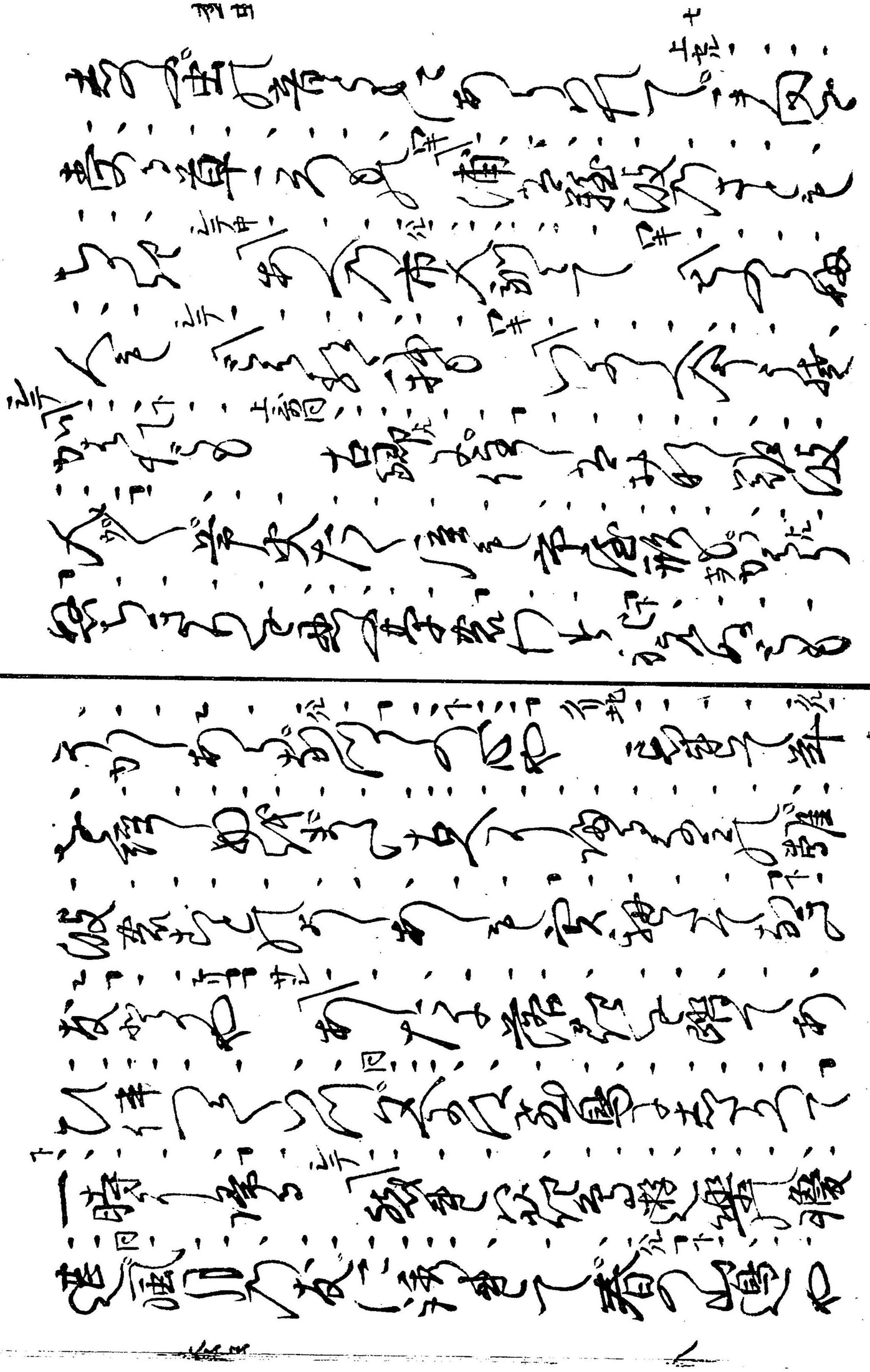




松山のぐ音よりそりたち市人の
ぎ桜うえておさいたのせ霊宴に参り
たり懸うや日暮さとおもとぞうたる
市人入ぎと加けよ陽暮てあへ野の
かうう停ときりくう梅きや
ては世みとなりきすうのもつて
ぐほとう女人ぎぐうたちかめ

絵へ抄帝秋の雁松山をなくめを
我とや待声ありん　上毛　うるこ
山の音の鹿ときまり拝うとう紙
うるの言葉うれ出鶴もやくと世
女とはまてうこ長きとれ比なのとうれ
見め　上毛　うくつる日出たるとぞ古歌等
みと秋の野とよ　上ニテ　人まとれ出て告と





秋の野に荒れまがりて出でしひぢを
こゝろのゝ道とたづねしやうの一樹の陰の宿り
を他生の縁とやなつかしの流れ汲
てたるを心ぶかしの奥山の深谷に
たるの菊の水くきもかはらぬ流れ
き流れて盃にうかべしきくの露
ありがたく廬山の麓にきたりて

ぬ室の戸に苔ふかく閉ぢ籠りて
清らに思ひ出の露の迹を
て道とうや

問ひもとめてこゝろのこゝろ
かと猶善の行慶家に養ひ
道しかば濁世の人間にて
ありこゝに捨てるこゝろやきを

竹葉の紅なるに、我
ひとり醒をきて、萬木皆紅葉せり
松山の獨り寂寞まり醉を
かりて遊さん　りんりの
雲を出るに花の袖　おろかなる
すゝをぬ出る音の　さゝやき
きりぎりす

蟋蟀

ぎりぎりすきて蟋蟀　蟬　蛩　の音の
ぬ出るに　松山の老ぬ
ぬ出るにて　おるる聲　いとゞ
上句　名所の鐘　明　いのち
とゞ　の秋　ぎりぎり
ぎねく尾花のほつかなる　ぬ
草　たるあり　たりぬ

松虫

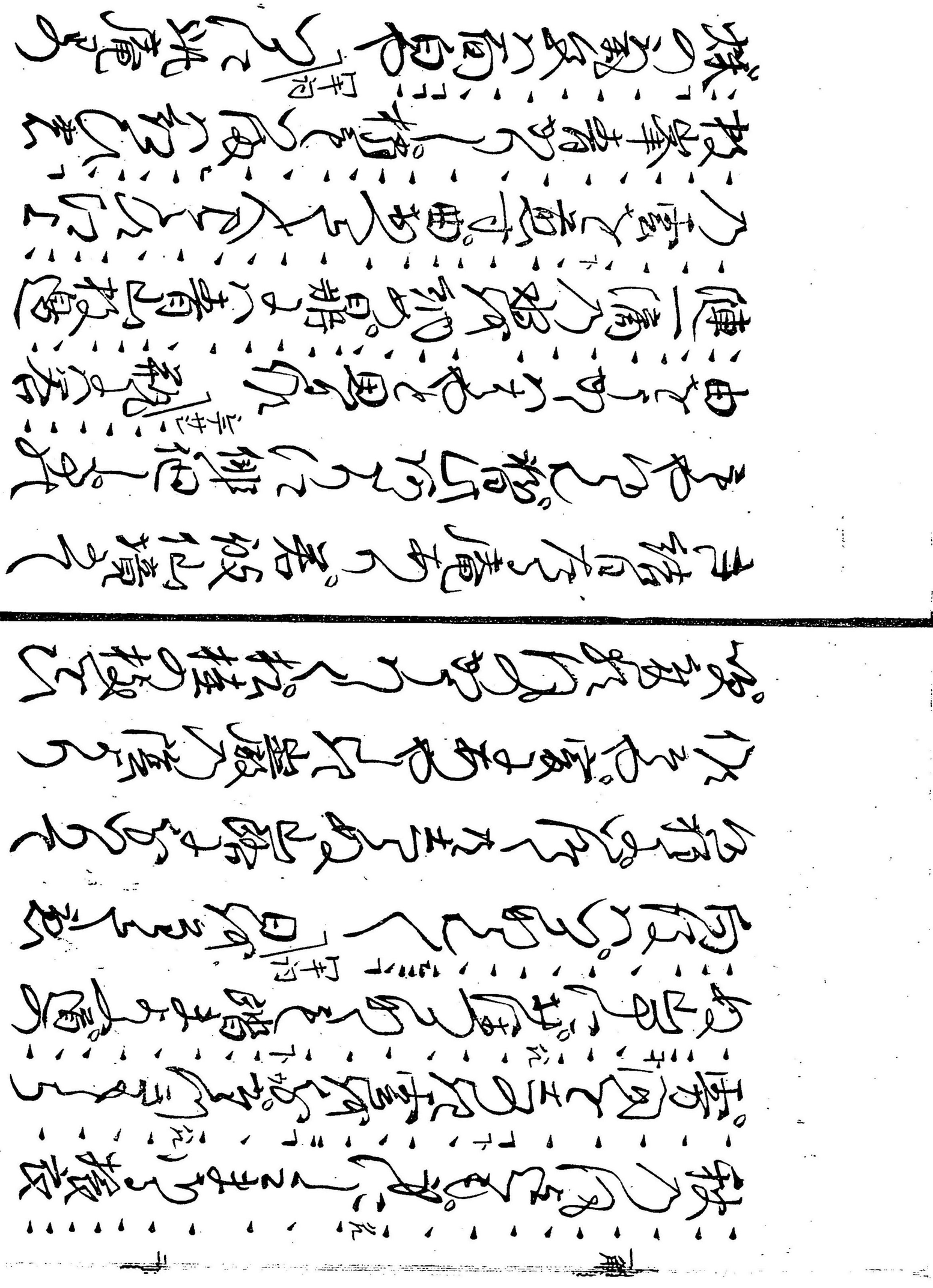
ぼうたるあしたの原にまじり乃音ばかりや残るらん虫の音計やのこる覧

一角仙人

ワキ詞

是ハ天竺波羅奈国乃帝王ゟ仕へ奉る臣下也。扨も此国の傍に一人乃仙人あり。鹿の胎内ゟやどり出生しゆへより額に角ひとつ生ひたるにより是を名付て一角仙人と申つくけるに細有て龍神と

威をあらはす仙人神通を以て
諸竜をあとゝめ岩屋の門に封
じて動る間数日雨降すゝぎ門
世界を弥生に成る多く此方便を
思ひ給ふ宮殿に接地人ゝ
らしめ義人の品位を選び
賞し猿人の心を移し神通を
生ず中古きの行方便よ
り人々を導ぶ仙人と彼山霧
（セイ音ル）（山袁）
跡をつゝみ松雲行宮の
（ヒ）（ヒ）
入り給ひ猿人
（ウ）（ヤ）
雨降る山陰に下り給ふ



門へ申をこ事なく　こゝ内　つきや宮へ
高山をくやくべ倫面ゝ有ゝ
ぞそ御身いつゝ有る者て　甲　見ゝ只
山路よつゝ楽てたゝ根へ成ゝ日を
やゝく言ゝ門ゝ前後を高て仕
ゝ戸ゝ宿御門ゝ入　こゝ　りきゝ社へ
同ゝ家ゝ有ゝ有ゝ有ゝ有ゝ有ゝ有ゝ有ゝ

見ゝ　こゝ　甲　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
きゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
門ゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
外姿　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
十六　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
青門　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
十六　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
緑門　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
門ゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ

唯今思ひ出して候扨ハ我等か一角仙
人とて御座候ひし　此は是社一角仙
や仙人にしばらく面をも見えやさしく
寿命の猩人に飛ありしを義家宮女
乃形様の袋星羅綾の言ねはさ只人
とも見えず候へば是はいかなる人にてま
し候ぞと、御身に申さらし猶未有

たる猩人にて候ひし猩乃所為ましの慰にて
酒を持て山に行き候ひしに仙人
や仙境よりハ松の葉をも苔をも衣
きて桂の霧をもて年をふる不
老の霧の此寿あり酒を用る事有
御し　名には寿にて候唯寿
を積て天の大破に至り仙人に

酒をもしまいへ（テ刃）きに春をもきこえ
鬼畜よりはなれ（上）ゆ（乃）れ
面をぬく（元）ぬきをもなへのはら油白
姫菊の露（元下）ちりもよ（ヤ）ぶかのへき
契りは（夫下）けをなかの（ヤ）面白や愛（ヤ）く
ぬきりをもりを照（元）やなぶをれ狂
て去よひらを（元下）歌と舞楽の曲を面

五

白き（ガク上）色行乃をへ（上刃）ぬりぶ（ウ）く
ぬを愛度をめ（元下）れを夫への情よ
ぬ（元）仙へを沈東に弱車れをも
たを舞の狂を四（元）きぬ人を
ぬ官へを引（元）きれく山
路を去乃ぬ帝都よ角ををへきり（元下）
ひきれ（上）岩屋乃口をさりに鳴動を

六

「ここに六月二十五日ニ
て、大地をひくがごとくなり也　あるとき
やがて、人情は盃を碎伏ら
し其時は龍神を封こめ給ふ
厚入俄に鳴動して行ひ給ふ
やがて（脱上）水にやすよ角仙人の問ふ
変り心をまよへり。羽は酒を碎伏
て面方をうめ給ふ時のぶしの弱を

思ひ出す　山風あらく吹落てく
ぶうさに墨り出屋も倒よゆらくと
そ山繁石冥方よ吹き搖きく法乾
乃姿へ引き立ちり（ハタラキ有上）て時仙人れと
ろこり、（叶ハミ）く。手劔をを引立
向へ竜王へ黄金乃甲冑を著し
玉具乃ちきをを（脱）

143
6
72

一角

うほとゝ鳴りきらう。伊八神面の力も
仏さて。浮にくり倒きつゝ竜王
ちらし雲うせ。雷電猫妻天地
よみて。大雨ゝ法水を出し
立宿よ光うつり。さ浪よ
移くぼ。竜宮（八九下）呂ゝ絵りきれ（八九上）

七終